

# 日本文学報国会への道

——戦時下の文学運動——

都 築 久 義

## 国策文学団体の結成

昭和十三年八月二十四日の新聞は、内閣情報部が作家を漢口攻略戦に派遣することを大きく報道し、二日後の八月二十六日午後、首相官邸で派遣作家の氏名が発表された。選ばれたのは、吉川英治、岸田国士、瀧井孝作、深田久弥、北村小松、杉山平助、林芙美子、久米正雄、白井喬二、浅野晃、小島政二郎、佐藤惣之助、尾崎士郎、浜本浩、佐藤春夫、川口松太郎、丹羽文雄、吉屋信子、片岡鉄兵、中谷孝雄、菊池寛、富沢有為男の二十二名である。

人選にあたったのは文芸家協会会長の菊池寛で、『文芸春秋』の巻末にいつも書いていた「話の屑籠」(昭13・10)によれば、〈激戦の中心たる漢口方面へ行くのだから、希望者が少ないのではないかと心配し、自分の懇意の人達を説得して行つて貰ふつもりで、頼み易いやうな人々に情報部へ集つて貰つた。ところが十一、二人集つた連中の殆

ど凡てが行く〉と出だし、そこで情報部も二十人位までよいと思うので、二十四、五人も交渉すれば、半分は行つてくれるだらうと思ひ速達を出した。すると二、三人を除き、皆行くと云ふのであつたとのことである。

菊池寛が速達を出して交渉した作家の人数は、『文芸年鑑』(昭和十五年版)には三十余氏とあり、一部の新聞報道には五十氏とあつて正確な人数は定かでないが、希望者が殺到して人選に漏れた者が大勢いたことはまちがいない。事実、人選に漏れた不満や人選をめぐるデマや臆測が飛びかつたことは、『日本評論』(昭13・10)の「匿名時評」などが伝えているが、〈内閣情報部の計画そのものに対して何人も双手を挙げて賛成し、喝采し感謝した〉ことはたしかだった。そして人選の発表から九月十一日の陸軍班の出発(海軍は九月十四日)まで、新聞は連日のように彼らの記事を載せ、ペン部隊と呼んで人びとの耳目を引き寄せた。

ペン部隊海軍班の一行は、残留を希望した杉山平助を残して十月十一日に帰国し、陸軍班は途中から思い思いの部隊に従軍して帰国はまぢまちだったが、帰還するといっせいに従軍記や現地報告を発表したのはいうまでもない。しかし、火野葦平の「麦と兵隊」〔改造〕昭13・8)の人氣と評判に圧倒されて、もはや文学者の従軍記への人びとの関心はほとんどなかった。観戦者の戦記よりも、実戦者の戦闘記録に読者の人氣が集つてしまったのである。そのため内閣情報部の思惑も、参加者の期待も外れたが、ペン部隊の派遣は文壇に時局に対する新たな認識と動向を派生させた。昭和十四年二月一日付の『日本学芸新聞』は、第一面の紙面の約半分を使い、「時局と文壇 簇生する集団」その成立の経過と動向」の見出しで、次のような記事を載せている。

過ぐる武漢攻略を前に内閣情報部の企画により多数文壇人の陸海軍従軍が実現されたのを機縁に文壇の時局的関心は頓に高まり単身大陸に赴く者も尠くなく、先づ有馬前農相後援の下に「農民文学懇話会」の成立を見、更に新しき東亜文化建設を目指す日支評議員七十余名の東亜文化協議会の開催と前後して文壇につきつきと時局的集団発起の報道が齎らされた、警戒・批判の機会は暫く姑き、それら集団成立の経過と動向を辿り今後を見守らう

との書き出して、農民文学懇話会、文芸興亜会、評論家協会、都会文学懇話会、大陸開拓文芸懇話会、旅行文化懇談会のこと詳しく出て

いる。

このうち農民文学懇話会は、すでに前年九月四日に有馬頼寧農相と島木健作、和田伝、丸山義二らの農民文学者が懇談会を開き、十一月七日に発会式をあげているが、文芸興亜会以下の団体はペン部隊の帰国後に結成準備会などを持って活動を始めている。とくに文芸興亜会は従軍作家が中心となって結成の準備を進めて注目され、都会文学懇話会は東京市長が提案して話題になった。が、両会とも旗あげをしただけでその後の目立った活動はなかったようだ。

先陣を切った農民文学懇話会とともに、最も活発な活動を展開したのは大陸開拓文芸懇話会である。同紙によると、十四年一月十三日に学士会館で結成準備会が開かれ、拓務省側から総務課以下五名が出席し、文壇側から高見順、福田清人、伊藤整、荒木巍、春山行夫らが顔を出している。この会の成立事情については、「満州国」における文学の種々相」〔旧植民地文学の研究〕勁草書房 昭46・6)を書いている尾崎秀樹が、福田清人の回想から「荒木巍が満州の開拓者を題材にした作品の執筆を思い立ち、高校時代からの友人近藤(春雄)に頼み、拓務省へ紹介してもらったのがそもそのおこりらしい」と述べ、〈拓相八田嘉明の甥にあたる近藤春雄の奔走〉によって誕生したと記している。が、高見順は、「国策文学検討座談会」(読売新聞 昭14・6・13)22)で、〈僕が満州に行きたいといふ話をしたら、僕の友達拓務省にゐて、間に入つて話してやらうといふことで、それぢや便宜を払つて貰はうといふことになつて、荒木(巍)の肝煮りで文壇と

拓務省の繋がりをつけたわけで……と発言しているので、正確なところは不明である。

いずれにしても結成準備会から二ヵ月後の三月四日に八田拓務大臣の官邸で発会式を行い、さっそく四月二十五日は福田清人、田村泰次郎、伊藤整らを大陸開拓国策ペン部隊の第一陣として満州へ派遣した。そして十月には「開拓地帯 大陸開拓小説集(一)」を編集し、湯浅克衛、福田清人、荒木巍、田村泰次郎、伊藤整、豊田三郎、井上友一郎らの作品を収録した。同会の活動は会員の創作活動もさることながら、事業内容として掲げた(大陸開拓事業の視察並に見学に対する便宜提供)が顕著で、同会の世話で満州へ渡った者も大勢いたはずである。

会員は主要メンバーの福田清人の関係から伊藤整や春山行夫といったモダニズム派もいたが、高見順や荒木巍らの「人民文庫」の旧同人が目立つ。農民文学懇話会のメンバーの大半をプロレタリア文学の転向者が占めていたように、大陸開拓文芸懇話会にも旧左翼系の作家が大勢いたのである。つい先年まで権力と激しく対峙していた連中が、今や権力の尖兵となって国策遂行に積極的に協力しているのが興味深い。彼らにしてみれば労働文学の手法をそのまま国策文学に転用するのは容易であったし、国策に協力しているかぎり前歴をとがめられることもなかったし、活動の場は与えられたのである。

農民文学懇話会や大陸開拓文芸懇話会に所属して国策遂行に協力したのは、旧左翼系の作家や一部の若い青年作家が多かったが、文壇を

あけて展開された国策協力の活動は文芸銃後運動だった。これは文芸家協会会長の菊池寛が発案し提唱した、文学者による銃後文芸講演行脚であるが、その経過については文芸家協会発行の「文芸銃後運動講演集」(昭16・5)の巻末で次のように説明している。

「文芸銃後運動」の実施が決定されたのは昭和十五年二月であった。文芸家協会は時を移さず全国に講演会を開く日程の作成及諸般の準備を開始した。協会は先づ会員諸氏に飛檄して本運動の主旨を伝へ、各自の講演会希望地、出演の都合等を問合せて、文芸家が自費自弁の覚悟で奮って参加されん事を求めた所、著名文壇人が欣然として之に賛意を表し、五十余名の申込が集つた。そこで全国を八地方八班に分ち、他に東京市内及関東近県を別班として、講師の割宛を行ひ、全国講演予定地七十二ヶ所に対し、各地方別に班を組織して月を逐うて順次に之を巡回する事とした。

こうして五月六日の浜松市での講演会を皮切りにして、第一班の東海・近畿班が九日間にわたって八都市を巡回講演した。参加した文学者は、久米正雄、岸田国士、横光利一、林芙美子、中野実、吉川英治、菊池寛の七名、聴衆の総計は一万六千人、会場に入りきれずに場外に拡声器を備えた会場も三ヵ所あったという。以後、六月は甲信越・北陸(参加文学者八名、以下数字は参加文学者数)、七月は東北(六名)の他に東京市内(二十六名)と関東近県(二十八名)、八月は北海道(四

名)、九月は中国地方(五名)、十月は四国(五名)、十一月は九州(六名)と全国を巡り、さらに朝鮮・満州(八月、五名)や台湾・広東(十二月、五名)にも行っている。実に五十余名(延べ百名)の文学者が、この講演会に参加して、(銃後文芸家の奉公の熱意を国民に伝へた)(同著序文)のである。

文芸銃後運動は文芸家協会が主催し、文芸春秋と大阪毎日、東京日日新聞社が後援するという名目で行われたが、実務的な仕事は文芸春秋と新聞社が担当し、力も入れていたので、雑誌や新聞の販路拡張事業だとの批判もあったようだが、おおむね好評だったため、引き続き昭和十六年も第二回文芸銃後運動が実施された。こんどは五月十六日に東京で幕開けした後、近畿地方からスタートを切り、十一月の南九州で幕を閉じた。第二回目は新設された情報局や大政翼賛会文化部も後援し、第一回目の時には行けなかった小都市にも足をのばし、外地では樺太(七月)にも出かけている。翌十七年は大東亜戦争下であったが、日本文学報国会の主催のもとで文芸報国運動講演会と銘打って開かれ、『文芸年鑑』(二六〇三年・昭和十八年版)によれば、(本年の講師は事務局で慎重人選の結果約二百名を決定した。よつて情報局では二十七日(七月)大東亜会館に全講師を招き壮行会を催した)とことだ。しかし、実際に開催されたのは七月に一回、八月と九月に各三回、十月に一回、十一月に二回で、講師も延べ五十名であった。すでに中堅の文学者の多くは南方の戦地に徴用されて内地にはいなかったのである。それはともかく、三年間にわたる講演会で演壇に立つ

た文学者は延べ人数で二百名にも達したのだから、まさに文壇あげての協力であったといえよう。

### 大政翼賛会文化部

近衛文磨が国民の期待をになって再び内閣総理大臣として登場したのは、昭和十五年七月である。二・二六事件(昭和十一年)後の政局の混乱のあと、救世の青年宰相として組閣の天命を受けたものの、就任直後に発生した支那事変を未解決のまま退陣を余儀なくされたのは昭和十四年一月だった。だがそれから一年半の間に首相が三人も交替し、欧州ではドイツと英仏が戦争状態になって、内外とも不安定と緊迫の時代を迎え、政治の刷新と時局の転換を求める声が高まってきた。そこで立ちあがったのが、内閣退陣後は枢密院議長を拝命していた近衛文磨である。十五年六月四日に新聞記者会見をして、今日の難局を突破するには新政治体制を整備し挙国政党の必要を説き、二十四日には枢密院議長を拝辞して、(内外未曾有の難局に対応するため強力なる挙国政治体制を確立する)ことに微力をささげると声明して、自ら新体制運動の先頭に立ったのである。

近衛の出馬表明と新体制運動は、たちまち大きな反響と期待をよび、七月二十二日に第二次近衛内閣の誕生となった。そして新体制運動は新体制への実現へと向かい、一ヵ月後の八月二十三日には新体制準備会が発足し、この間に政界では政党があいついで解党・解散し、各界・

各層で新体制が論議され、国民あげての話題と関心事になった。しかし、準備会は吳越同舟といわれたほど思惑と期待がまちまちで容易にまとまらず、とりあえず新体制樹立運動を速かに展開することとし、政府はこの運動の名称を「大政翼賛運動」と名づけ、これを推進する機関として「大政翼賛会」を置くことを決め、十月十二日にその発会式を行なった。『翼賛国民運動史』（翼賛運動史刊行会 昭29・1）によれば、この時に決定したこの運動の目的は、「万民翼賛、一億一心、職分奉公の国民組織を確立し、その運動を円滑ならしめ、もつて臣道実践体制の実現を期すること」であった。

とすれば、それは挙国的な新党を結成し、政治体制の刷新と指導の一元化をはかろうとした、近衛の当初の構想とはあまりにもほど遠いものだった。近衛も発会式の挨拶で「本運動の綱領は大政翼賛の臣道実践といふことに尽きる……これ以外には綱領も宣言ない」といつて自らの構想の坐折を認めざるをえなかった。にもかかわらず、年が過ぎて帝国議会が始まると、大政翼賛会の位置づけ、役割をめぐって批判や非難が集中し、幹部の人事で「アカ」攻撃を受けた。事務局長の有馬頼寧と組織局長の後藤隆之助が、近衛の側近で昭和研究会に属していたからである。結局、翼賛会は政治結社でも政治運動でもなく、公事結社であると答弁し、議会終了後に改組することだけをつけたのだが、それは名実ともに「新体制」に終止符を打つことであった。十六年四月、総務・組織・政策・企画・議会の五局と二十三部からなっていた本部事務局を、総務・組織・東亜の三局十部に縮少し、局

文学報国会への道（都築久義）

長・部長・副部長の人事も刷新した。規約上もあくまで国民運動の推進機関であることを明確にしている。その点について自らも情報局の課長を歴任した井上司朗は、『証言戦時文壇史』（人間の科学社 昭59・6）でこういつている。

もともと大政翼賛会の組織には、情報局の中核である内務省系の官僚達は、これを幕府的存在として非常な反感を持っていた。彼等はいずれも、自省の全国的組織にオーバーラップする半官半民間的の翼賛会の出現は、屋上屋として喜ぶ筈はない。特に翼賛会に対して、創唱者の近衛氏が手を抜いたあとは、その存在は、内務省の手によって全く弱体化された。

大政翼賛会はこのように外部からの非難や攻撃ばかりか、内部からの反発もあって骨抜きにされてしまったが、実は文化部だけは健在だった。それは幹部人事の刷新の際に、文化部の岸田国土部長と上泉秀信副部長の二人は留任が認められたことが明瞭に語っている。文壇の留任希望があったとはいえ、そもそも大政翼賛会を非難した連中にも推進した者にも、明確な文化政策もなく、さほど重要視もしていなかったからであろう。副部長の上泉秀信も当時の模様をこういつている。

大政翼賛会が誕生し、その中に文化部が設けられた時、文化部長

に岸田国土氏が交渉を受けた。その時、岸田氏は一体文化部では何をしたらよいのかと質問されたが、翼賛会の幹部の方々の回答は、それは担当者によつて定まるだらうといふことだつたのである。従つて大政翼賛会の中に文化部が設けられても、何をやつたらよいかといふことについては、その時まだ翼賛会の最高幹部もはつきりしておらなかつたのではないかと思はれる。(略) 一体文化部が何をするかといふやうなことははつきりしてゐなかつたので、岸田氏をはじめわれわれが、一体何をなすべきから検討し、研究して行かねばならなかつたのである。

【文化の様相】(大日本出版 昭17・3)

そしてその結果、十六年一月に「地方文化新建設の根本理念とその方策」をまとめ、大政翼賛会企画局文化部の名でパンフレットにして配布した。ここでは根本理念について、

この時に当りて最も大切なことは、国民が文化を全く新しき時代に即応して再認識することである。従来ややもすれば、文化をもつて政治、経済は勿論のこと、国民生活とは全く遊離した贅沢物乃至は装飾品のごとく考へ、それが根本理念に於て著しく消費的、享樂的であり、且つまた個人的、非公共的性質を帯びてゐたことは争はれぬ事実である、もとより文化の正しき消費性は尊重されるべきであるが、新体制における文化の建設は、以上のごとき誤

れる觀念をしりぞけ、全國民的な基礎の上になつた、生産面にふれた新しき文化を創造し、これが育成と政治目的の完遂とを、国民生活と東亜諸民族の生活の中に実現して行くことの中にあるのである。従つて国家成員のすべてがその創造と享受とに積極的に参加しなければならぬ。

としてゐる。ちなみに、前出『翼賛國民運動史』では、(自由主義文化、個人主義文化を払拭し、高度国防国家日本の國民文化を創造し育成することが、翼賛会に課せられた使命の一つであつた)と記してゐる。この根本理念や使命と地方文化の振興の關係については続けて、

思ふに過去に示されたるがごとき政治上の大改革は何れも國家の伝統を明徴することによつて行はれたことを想起するならば、今日の新体制確立もまた、光輝ある伝統の自覺によつて現代の事実、に立脚する精神の再生を必要とする。ここにいふ伝統の自覺とは、過去における特定の時代あるひは特殊の歴史的事實にかへる單なる復古に非ずして、何千年來皇室を中心として生成發展し來つた我が國文化の本質に基いて、新しい時代の文化を創造する維新にあることを銘記しなければならぬ。かくの如き日本文化の正しき伝統は外來文化の影響の下に發達した中央文化のうちよりも、特に今日に於ては地方文化の中に存し、この健全なる發達なくして新しき國民文化の標語を樹立することは不可能といふべきであ

る。地方文化の振興の意義はここにあるのである。

といっている。

文化に対する根本理念もさることながら、維新・改革と伝統を結び、伝統と地方文化を結合させた論理は牽強附会のそしりは免れないが、この根本理念と方策にもとづいてさっそく文化委員会設置要領を制定し、各道府県に文化委員会の設置を指示した。かくして全国各地に文化協会が誕生したため、こんどは地方文化組織の再編成の必要が生じ、十六年十月には東北六県の文化協議会を開催し、以後、各ブロックごとに開いた。むろん、ブロック協議会には本部からも役職者が出かけている。東北ブロック会議には最初でもあり、岸田部長・上泉副部長も列席したことはない。こうして地方文化運動に力を入れていることについて、岸田文化部長は次のように『日本学芸新聞』（昭和16・10・25）の記者に答えている。

文化運動には先づ組織拡充と機構整備が先行しなければならないことは勿論だが、現在のところ、これ等の具体的促進は、差し当り都会より地方に重点を置いて地方ブロックを中心とする文化翼賛態勢の確立に努力してあります。（略）かうして一先づ地方文化ブロックを中心とする態勢の整備が終了した上で愈々中央文化の連絡の中心組織を確立したいと考へてみます。

文学報国会への道（都築久義）

岸田部長のこの抱負はまもなく現実化した。同紙十七年一月一日号は、〈大東亜新文化の創造へ／文学者総進軍／文学者愛国大会開かる〉とトップに見出しをつけ、

大政翼賛会文化部では、大東亜戦争の勃発を契機として、決戦態勢の強化にして万遺憾なきを期するため、思想陣営の結束を固めべく、その具体的促進方法についてかねがね文壇側と協議を重ねてゐたが、漸やく成案を得たので、昭和十六年十二月二十日を期し、午後一時より大政翼賛会会議室に『文学者愛国大会』を開催した。この大会は、日本文壇始まって以来の文学者の集結として、まことに画期的な意義をもつものといふべく……

と報じ、第二面に〈翼賛会文化部の斡旋で／文学新団体の発足へ〉の記事がある。この会で文学者が一丸となった新組織の結成を決議し、翼賛会文化部が斡旋することになったのだ。そこでさっそく十七年二月初めには散文関係者が翼賛会に集って、名称を日本文学者会にすることなど討議した。ところがその後、名称は日本文学報国会になり、五月二十六日に創立総会を開き、六月十八日に東条英機首相や谷正之情報局長を招いて発会式を行なった。この半年間の内情を戸川貞雄は

その間の経緯を縷述するの煩は避けるが、委員会の進展するにつ

れて、次第に審議事項は具体化され、当初主として産婆役を務めた翼賛会文化部と代つて情報局五部三課が、指導監督の立場にある官庁として乗り出してきた。当時の五部長川面隆三氏、三課長上田俊次海軍中佐等の懇切周到なる斡旋により、会の進行は著々軌道に乗つてきたのである。この間、諸委員会の開催さる、ことまさに六十余回に及んだ。

かくして、日本文学報国会は社団法人として、冒頭に記述せる如き華々しき発足を見るに到つたのであるが、この際、特に録しておきたい事柄の一つは、約半歳にわたる準備期間中、いかに蔭の努力が払はれたかといふこと、一々氏名は挙げないが、例へば情報局に在つては情報官井上司朗氏（現五部第三課長）であるとか、翼賛会においては元文化局員小場瀬卓三氏であるとか、これらの人びとの献身的努力は忘れてはならないと思ふ。

と、「社団法人日本文学報国会の成立」(前出「文芸年鑑」)で述べている。このことは戸川貞雄の文章にも登場する前述の井上司朗も、(日本文学報国会の成立は昭和十七年六月十八日だが、それに至るまでは、文壇は国策順応といいながら主義主張を異にする大小十数余の集団が結成され、それが大政翼賛会の手ではまとまりかねているので、その幾つかのグループからの要請により、情報局が斡旋し……) (前出「証言戦時文壇史」)と証言している。

日本文学報国会の成立過程において、情報局五部三課が乗り出して

きたのは、井上のいうように、(大政翼賛会の手ではまとまりかねていたからなのか、あるいは当時、同課の嘱託だった平野謙のいう(途中で情報局五部三課がよこどりして、自分の仕事にしまった)(「アラヒトガミ事件」【平野謙全集】第十三卷)のかはわからないが、東条英機内閣の登場、大東亜戦争の開戦によって、大政翼賛会に対する政府の認識が再びかわつたことは事実だ。第一回改組で縮少された組織も、五局十九部に拡大した。ただし、その内容は総務・錬成・実践・興亜・調査の五局を編成したことで明かなように、大政翼賛会を国民の動員や統制の機関にするための強化であった。東条内閣が組織の強化のために二回目の改組を閣議決定したのは開戦もない昭和十七年一月、新機構と新人事の発表があつたのは六月である。こんどは岸田部長、上泉副部長も更送された。この間に日本文学報国会結成の準備が進み、情報局が前面に出てきたのであり、文化部の「弱体化」も始まつた。情報局が設置されたのは昭和十五年十二月であり、大政翼賛会文化部の活動開始時期と同時期であつたことを想起すると、両者の関係の推移はまことに興味深い。

岸田国土の文化部長在任の一年八ヶ月は、たしかに政府当局の介入も内務省・情報局による「弱体化」もほとんどなく、大政翼賛会文化部はその創意によつてさまざま文化運動を展開した。しかし、文学や文化政策に対する根本理念は、時の政府や情報局と一致していたことは見落してはなるまい。



## 文壇新体制運動

新体制運動に文壇でいち早く反応を示したグループは、佐藤春夫、倉田百三らの「経国文芸の会」（昭和十四年十一月結成）であった。

昭和十五年九月五日付『日本読書新聞』は、「文壇一体化運動／烽火各所に挙る」の見出しのもとに、「経国文芸の会」が既成の文学団体に「文壇新体制協議会」の設置を呼びかける趣意書を発送したと伝えている。しかし肝腎の文芸家協会は、「文芸家協会としてはどう動くかといふやうな企ては現在のところまだない」（同紙 8・25）といった状態だった。そこで立ちあがったのが高見順らの有志グループであった。高見順は『文芸春秋』十月号の文芸時評で、〈新体制への対応に関して、現象的には、文芸が他の分野に比してやや立ち遅れの観を呈してゐる〉と不満気味であったが、翌十一月号では「日本文学者会の成立」と見出しをつけて、同会の成立事情と意気込みを熱く語っている。

私は、はじめ文芸家協会に、新体制対応の運動をおこすことを期待した。今日出海氏に話したのはそのことであつた。だが、やがて、文芸家協会は、文芸家といふ職業人をすべて網羅したところの職業団体であつて、それ自身で文芸運動の主体となることではでない性質のものであることを覚つた。運動の主体としては、新しい組織が別につくられなくてはならないのだつた。（略）

文学報国会への道（都築久義）

日本文学者会の誕生は、事情を明らかにすれば、この日本編集者会の文壇への呼びかけが、きっかけとなつたのであつた。雑誌編集者を通してそれぞれの作家と接触してゐる日本編集者会の人々は、それぞれの作家が個人的には新体制への協力の熱意を持ち、お互ひに呼びかけあひながら、従来のバラバラに孤立的に存在している作家の習慣から、その熱意を統一させる組織を持つに至つてないことを知つて、率先して、その結成のきっかけをつくつてくれたのだ。何人かの作家が、編集者の媒介によつて集められたのだが、作家たちは、編集者たちから日本編集者会の説明を受け、文学者も同じやうな組織を持つてはどうかと言はれると、もとよりそのきっかけを待つてゐたのだから、異議のあらう筈がない。満場一致で賛成したのである。（略）

日本文学者会は、新体制に対応しての日本の作家の一元的組織であることを目指してゐる。だが、運動のはじめに、急に機械的に会員をふやしては、会の持つ力と意義が散漫になる恐れがあるといふ考えから、はじめは少数の有志で結束的に会を作つて、運動の進行と共に会員をふやして行く方針が選ばれた。（略）今は、だから会は、完全を期しての基礎に當つてゐる機関の形を取つてゐる。

この「日本文学者会」の成立と経過を、『日本学芸新聞』の関連記事で追つてみると、編集者会と作家たちが懇談したのは九月二十一日

で、評論家たちとは二十八日に会合をしている。この懇談会に出席したのは尾崎士郎、榊山潤、岡田三郎、高見順、中島健蔵他数名であった。このうち高見、中島、榊山の三人が委員に選ばれて具体化を進め、はやく二十九日には三人の委員の起草案を検討するために、前記の他に横光利一、尾崎一雄、河上徹太郎、武田麟太郎、小林秀雄、島木健作、伊藤整らが参集して協議し、会名を日本文学研究会と決めた。そして十月十四日、会員二十二名を擁して旗揚げをした。前述の列記した以外に、阿部知二、上田広、川端康成、岸田国士、富沢有為男、林房雄、火野葦平、日比野士朗、深田久弥、和田伝の名もある。顔ぶれを一見すれば『文学界』同人と尾崎士郎の人脈が中心であることがわかり、そのセクト性を文壇で非難されたというのも納得できる。

高見順は戦後になって『昭和文学盛衰史 一二(文芸春秋新社 昭33・11)』のなかで日本文学研究会について詳しくふれ、この会が岸田国士を支持し、岸田国士に文化統制の防波堤になってもらうことを期待して結成されたかのごとき記述をしているが、岸田国士の文化部長就任後はともかく、結成の動機にそれあげているのが面白い。念のため言えば『人民文庫』で同志だった武田麟太郎も、(我々文学者も下から文芸政策を盛りあげて行く運動の実践に迫られて来た。それが日本文学研究会の成立である。文芸政策の確立するための運動の主体となろうと志向してゐるのだ)(都新聞 昭15・10・16)と述べている。

そもそも、岸田の大政翼賛会文化部長の就任決定は十月十九日で、彼は数日前に二ヵ月の満州旅行から呼び戻されて帰国したばかりだっ

た。九月二十一日の初会合の時点では、岸田の件は知る由もあるまい。いずれにしても高見順たちが張り切って日本文学研究会を結成したものの、文芸家協会が動き出して日本文学研究会は有名無実になってしまった。

文芸家協会が新体制問題を話し合うために会員を集めたのは九月二十五日であった。高見順らが編集者会の代表と会って四日後である。

『文芸年鑑』(前出)によれば、当日参集した会員は七十余名、(会員より夫々新体制問題に関し、意見の開陳があつたが、結論として、当局により新たに文芸政策の樹立をみることに既定の事実である以上、全文壇を網羅して政府へ進言し得る機関を設立し、政府へ協力することが此際の緊要なる處置であると言ふこと)になつたという。そこでただちに委員会を選定し、石川達三以下二十名が選ばれ、さつそく二十七日に第一回の新体制準備委員会を開いて、全文壇の連絡機関たる「連絡協議会」の設置を決定した。この決定によって経国文芸の会(佐藤春夫)、国防文芸連盟(戸川貞雄)、大陸開拓文芸懇話会(福田清人)、日本ペンクラブ(中島健蔵)、農民文学懇話会(間宮茂輔)、文学建設(海音寺潮五郎)、文芸家協会(木々高太郎)、ユーモア作家倶楽部(辰野九柴)の八団体の代表が集合し、十月十二日に第一回の会合を持った。この会合で会の名称を日本文芸中央会と命名し、八団体の代表を常任委員、準備委員会のメンバーを委員とすることに決め、十月三十一日に発会式を行なった。発会式には輝ク会(長谷川時雨、後に女流文学者会)と日本文学研究会(上田広)も加わって、十団体でスタート

を切った。

年があけて十六年一月、「日本文芸中央会の使命」を発表し、三月十日号（一〇四号）から川合仁が発行していた『日本文芸新聞』を機関紙にした。機関紙第一号に「日本文芸中央会の使命」と「日本文芸中央会の成立経過と現状」が載っている。そこには「究極の目標」として次のように書いている。

皇道翼賛会の国民運動とは、即ち日本をもつて世界最強の国家たらしめんとするための民族の一大建設行動であり、従つてこの運動に於ける文化活動の意欲は、現段階に於ける我が国の目標に誠実であると同時に、更に高度の、遂には最高の水準にまで達する国民文化創造の使命の自覚に向けてゐなければならぬ。現段階に於ける我が国家の目標が東亜共栄圏の確立にあることいふまでもなからう。日本文芸中央会は、かかる認識と自覚の上に立つて、文芸家組織の一元化も図りつつ、もつて全日本的国民文芸運動の中核体たり推進体たる任務を果さんことを究極の使命となすものである。

現状については、その後、文化再出発の会、三田文学会、日本青年文学者会、文芸首都の加盟が報告され、十四団体、会員二千人の加入を伝えている。機関と役員は常任委員に各団体代表と旧準備委員をあて、書記長・書記の他に専門部として企画・調査・連絡・出版の四部

文学報国会への道（都築久義）

を置いた。会長や代表はなく、間宮茂輔、片岡鉄兵、木々高太郎、今日出海（書記長）を幹事に選んだ。機関紙の活動報告の記事を見ると、常任委員会はかなり頻繁に開かれていたようだ。また編集者会や評議家協会との合同会議や国民文芸コンクール、地方文化団体との連絡会議なども企画した。しかし、所詮は寄合世帯であり、それぞれの団体は独自の志向と意思で行動をしていたから、日本文芸中央会としての活動はできなかった。

そこで八月になって幹事の刷新を行ない、戸川貞雄、中島健蔵、海音寺潮五郎、円地文子、福田清人、石田正二を幹事に選び、書記長も近藤春雄にかわった。「日本文芸中央会の任務と方向」（『日本文芸新聞』昭和16・8・10）も、「日本文芸中央会が新らたなる段階に直面して内部的組織機構の整備を完了し、外部的働きかけの積極化によつて、国民文学運動の中核体たり推進体たる機能化を企画」して、青少年文学の振興、郷土文学の振興、巡回文庫の提唱、芸能文化への協力を掲げた。が、これらの企画や提唱がいずれも成果を得られなかったばかりか、機関紙では相変わらず「日本文芸中央会への結集」を訴え続けねばならなかったところに、日本文芸中央会の実態があつたといえよう。大政翼賛会文化部が地方文化振興に力を入れ、文芸家協会が文芸奨励運動を展開し、従来からの農民文学懇話会や大陸開拓文芸懇話会は独自の文学賞まで設定して、それぞれ独自の活動を続けていたのだから、日本文芸中央会が組織として〈外部に働きかけ〉る余地はなかったのだ。したがって日本文芸中央会が〈国民文学運動の中核体たり推進体

たる）ことができなかつたのは当然である。結局、文壇新体制——文学者の組織化として大同団結を目指した日本文芸中央会も、自らの手ではなしえず、せいぜいその地ならしをしたにすぎなかつた。

日本文芸中央会は大政翼賛会とはちがひ、純粹な民間組織であり、それゆゑ権力も影響力も少なかつたが、政府当局の強制や指導によつてではなく、自発的な彼らの文学や文学運動に対する根本理念が、時の政府指導層とかわりなかつたことは注目しておかねばなるまい。要するに戦時下の文学運動は、官も民も同じ理念で同じ目標に向かつて、その主導権争いを演じ、日本文学報国会の結成に至つて、官民が一致したのである。